

禁煙っていうのは、簡単なようでなかなか難しいもんだ。

くせになっっているので、いつのまにかタバコに手をのぼしてしまう。「どうにかうまいこと辞める方法はないものかなあ」

男がポツリともらすと、5才になるその娘が「じゃあ、あたしのためにやめて」と言う。

「どういうことだい？」

「もしパパがおタバコ吸ったら、あたしが好きなものをやめることにするわ。あたしのがかわいそうだと思ったら絶対に吸っちゃダメよ」

「ようし分かった」

男は何げなく娘と約束をかわした。

「あら、どうして残すの。大好物のはずでしょ」

その日の夜。なぜかおかずのハンバーグを食べようとしないうちに、母親が聞いた。

「あのね。さっき、パパがおタバコ吸ってたの。だからハンバーグ、大好きだけれど食べないの」

男は思わず咳き込む。「参ったなあ。見てたのかい。いいから食べなさい」  
「だって……、お約束したもん」

確かにこんなことを愛らしい顔で言われたら、タバコなどもう吸えない。

「分かった……、これからは絶対に約束を守るから」

「じゃ、指切りよ」

娘はこぼれるような笑顔と共に、小さな小指を男の前に差し出した。

「ゆ〜びき〜りげ〜んま〜ん……」

男は思った。ああ、おれは幸せだなあ。

「パパ！ パパ！ 大丈夫!？」

娘が勢いよく病室に飛び込んできたが、ベッドの上の男は返事をする事ができない。

「パパ！ パパ……!! ママ。どうしてこんなことに……!？」

「何日か前、急にタバコを何箱も買って来たかと思うと、狂ったように吸い始めたのよ。やめさせようとしたんだけど、どうしても言うことを聞かなくて……。よりよつて何で今日、こんなことに……」

「待って、パパが何か言ってる!」

「や……くそく、ま……も……」

娘は涙声で言う。「約束を守れなくてごめん……って言うのね？ いいのよ。そんなこと。だから早く元気になって!」

「ち……が……う……、ま……も……れ……」

「ご臨終です」そばにいた医者が男の脈を見てから言った。

「パパ……!」

娘は泣き崩れた。涙に濡れた白いウェディングドレスが眩しかった。

